

# アーティスト・イン・スクール

## 心の根っこを育むアート × 教育の可能性

### Writer

秋田 美緒 AKITA Mio

(川口市立アートギャラリー・アトリア 学芸員  
博士前期課程芸術専攻芸術支援領域平成 22 年度修了)



川口市立アートギャラリー・アトリア 外観

入口からまっすぐに約 45m にわたって続くガラス窓からは大きく広がる芝生広場を持つ公園が見える。見えるというより、まるでつながっているかのような印象を持つほどの視界の良さだ。そのまま温かみある木材の廊下を進むと、天井高 5.5m、大きく開けたスペースにつきあた

る。スタジオと呼ばれるその地点から少し視点を変え、小さなドアをくぐって別室に入っていけば、そこは白い壁が四方を囲むホワイトキューブの展示室。決して大きくないフラットスペースである。「川口市立アートギャラリー・アトリア」(以下、アトリア)は美術館あるいは画廊

にありがちな「立派な入口から薄暗い中へ」「敷居が高く静かなところ」というイメージとは少し異なる。1 年を通して明るいこのスペースが私の「現場」である。

企画展やワークショップが数多く展開するこの施設では、外に近い雰囲気もあるからか、開館当初 2006 年からアウトリーチ活動も数多く行われている。美術施設から地域にアプローチしていく活動は近年注目されているように思うが、市立であるという、つまり公共的な役割が強いという意味においてこの活動の意義は大きい。今では近隣に住む川口市民をはじめ多くの方々に理解を得、その活動の幅をひろげている。

その中のひとつが「アーティスト・イン・スクール」というプログラムである。この名前も最近ではよく聞かれるようになった。アーティストが学校で活動をするこれらのプログラムは主催者によって内容が異なっているように思う。作品を展示するギャラリーをつくったり、放課

後に児童・生徒と一緒に工作してみたり、あるいは空き教室をスタジオにしてみたり、私が知っているだけでも様々な例がある。ここからはアトリア独自の「アーティスト・イン・スクール」(以下、AIS)がどのようなものか、これからの展望も含めながら、述べることにする。

最初に挙げるべき点であり同時にもっとも重要だと言える特徴は、アトリアの AIS は「授業」だということである。放課後にアーティストの制作を間近に感じる、あるいは教室や廊下といった学校の空間の中に作品が存在するといったことでは成り立たない。小・中学校での美術や図工あるいは総合学習などの授業時間をつかって、アーティストが講師として授業を行なうのだ。しかもそれは 1 回限りの

ワークショップではなく、2~3 ヶ月間続けられる。ひとつの作品が完成するまでに授業が何回かある通常の指導過程と変わらない。

授業を進める講師としてアーティストがかかわることで生まれる効果は様々にある。まずは児童・生徒(以下、生徒)と講師との密接なコミュニケーションが生まれることだ。数回の授業の中で彼らは様々なやりとりをする。一緒に作品をつくることであったり、制作のための取材であったり、あるいはただの雑談だったりもするのだが、このやりとりによって生徒にとってアーティストは珍奇な客ではなく、想像力・創造力を伸ばしていく過程と一緒に歩む身内になる。アーティストにとっても、考えを共有する仲間になるのだ。



共にひとつの作品を仕上げる講師と生徒  
(第 7 回アーティスト・イン・スクール" HOMOLUDENS: PLAYING MAN"  
タイダ・ヤジャレヴィチ(版画家) × 川口市立芝園中学校 より)